令和４年度　第２回　高砂市未来技術地域実装協議会　議事録

開催日時	令和５年２月９日(木)10:00～11:40
開催場所	高砂市役所南庁舎５階大会議室
出席委員	12 名(別紙名簿のとおり)
その他	傍聴者:９名　オブザーバー:内閣府地方創生推進事務局
議事	（1）　第１回の協議会について （2）　令和４年度の取組について(第１回協議会後の取組み) （3）　令和５年度の取組について （4）　その他
資　料	事前配付資料 第２回　高砂市未来技術地域実装協議会　次第 たかさご未来資産を貯めようプロジェクト全体像(案)

議事の経過
1　開会 ＜本日の資料の確認＞ ＜本日の進行について説明＞ 2　市長挨拶 おはようございます。高砂市長　都倉でございます。皆様、本日は、午前中にもかかわらず、お忙しいところ、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。 昨年 11 月 25 日に、第 1 回の協議会を開催させていただき、皆様から貴重なご意見を賜りました。 本日は、第 1 回協議会後の取組と来年度に向けての考え方をお示しいただき、ご意見を賜りたいと考えております。特に、会長であられる畑教授におかれましては、資料にもございますが、市職員向けに講演いただき、また、今回の資料を作成するにあたり多大のご支援をいただき、まことに感謝する次第でございます。 また、内閣府の地方創生推進事務局のご担当者様には、交付金活用の検討のなか、貴重なアドバイスをいただき、ありがとうございました。本プロジェクトを成功させるには、地道に一歩ずつ取り組むことが必要と改めて実感したところです。一部スケジュールの見直しやポイント制度の考え方のたたき台、部会の設置等を今回お示しております。 本プロジェクトがよりよい制度となるよう、本日も皆様から忌憚のないご意見をいただきますようお願いします。 3　議事 （1）　令和４年度の取組について(第1回協議会後の取組み) （2）　令和５年度の取組について （3）　その他
質疑

(1)令和４年度の取組について(第１回協議会後の取組み)

〇会長

お忙しい中、２回目に集まっていただきまして、感謝いたします。

１ 回目では、一体何をするのかなというのが皆さんも頭の片隅にはきっと残ったのではないかなと思います。これまでバラバラに捉えてきたことを組み立てようとしてるというのが一つです。

もう一つは、価値の実現に向けた議論がたくさん出されているということ、たとえば SDGs だとかですね。中でも脱炭素だとか、トランスフォーメーションですね。デジタルであろうとなかろうとポストコロナと今言われてるわけですけども、そういう中で私たちは本当に変革できるのかというところが大切ですね。その一方で、先日、市の職員の皆さんに集まっていただいて、この取組の理解のベースになるようなことを若干散漫な研修でしたが１時間ほどお話をさせていただきました。

その中で、やはり気になったのはゼロカーボンシティ宣言ですね。中身を見ていると、温室効果ガス排出量の割合が、平均の２倍近く多いということを確認しました。脱炭素という部分には大きな壁になります。デジタルトランスフォーメーションは、技術だけじゃなくって、社会をどう豊かにするするかというところが重要なポイントです。

これまでの高砂市の資料はどちらかというと、技術系に重点を置いた組み立てになっていましたが、高砂市ならではのコミュニティをどう、デジタルの力を使って維持・充実していくか。これはおそらくベンダーでは不可能な作業だと思います。

それをしっかりとやっていくことが重要で、その議論がまだ十分ではないのかなと思いましたので、職員の皆さんにも提案させていただいてます。

高砂市も来年度に向けて、予算であるとか組織体制の整備といったようなことも、市長がご判断いただいてるというようなこともお聞きしていますので、そういった中で今後どう進めていくか、今日はそういうことが基本的なテーマだと思っています。

本格的に第一歩を踏み出したなと思いながら、今日の資料を見ていただいて、ご意見をいただくのが重要かと思います。

第１回の協議会の概要を振り返りながら、令和４年度の取組について、ここまでやってきましたというところをまず、もちろん問題点はいろいろあると思いますのでその辺はご指摘いただいたらいいかと思います。資料説明を事務局の方からお願いしたいと思います。現状を踏まえて、具体的にやっていける、あるいは高砂市としてやるべきことを再整理していただいたことだという理解をしたいと思います。何か質問とかご意見とかございましたら、発言していただきたいと思います。

〇委員

事前に市役所の方から説明を受けましたときに、確かに最終イメージがちょっと私自身も掴みにくいと感じました。具体的に、どんな形でデジタル化がこの高砂市に入っていくのかなということが正直掴めなかったわけであります。

会長の方で仕切っていただいたかもしれませんけれど、サービスの実証から始めるということは非常にいいことだと思っております。特に市民の方から本当は意見があれば一番いいと思いますが、実際にはなかなか意見をいただくのは難しいかもしれません。そこで、どういったことがこの高砂市に一番フィットし、一番馴染んで導入されるのかということを、まず仮にでも市の方で決めていただいて、それに向かって、いろんな意見聞きながら進めていくのがいいのかなと思いま

す。
〇会長
　市役所サイドで全部決めてと言われても、市役所はなかなかトランスフォームしにくい組織の代表例だと思いますので、そういう意味で言うと皆さんから厳しい、あるいは参考になるご意見をたくさんいただくことが重要かなと思います。
〇委員
　どうしてもデジタルというと、基幹システムみたいなそういうイメージを結構持たれることが多いのかなと思っております。そういう中で非常に重要かなと思っているところがございまして、市民の方々にどういうふうに知らせていくのかというところで、高砂ナビっていう一つツールがあると思うんですけども、それが市民の４分の１の方はインストールされているということです。ただ、どういう使われ方をしているのかということが、やはりちょっと明確じゃないと思うんですよね。そのツールを使いながらやるのか、それとも、もうちょっと多様なデバイド対応が必要な方にはどういうふうにしていくのかとかという、ちょっとそういう優しさ的なことも含めて、発信の仕方というのも並行して、ご検討していただくことが多分重要かなと思っておりまして、どうしても作り手側というのは、次これでいったらいいやろうというところでいってしまうんですけども、それを実際受け取る側の方が、受け取れるのか、ないしは、それを本当に見てるのか見てないのかとか、そのためにもいわゆる KPI といいますか、視点というのも必要かなと思っております。
　脱炭素とおっしゃっているところをしっかりやっていくというところと、それから、会長が仰ってました高砂市らしさというところでコミュニティがやはりたくさんある、そういうところをどう活用していくのかっていうところも、ちょっとこれはデジタルと離れるのかもしれないんですけども、それも並行していかないと、なかなか作ったものの発信と、それを享受する市民の方々というのが、やはりペルソナといいますけれど、いわゆる人、市民の方も、若年層もあれば、高齢者もいれば、いろんな考え方もいらっしゃる。誰をどういうターゲットにしていくのかっていうことも、考え方としては必要かなというのは、1 回目の資料、2 回目の資料を拝読させていただきまして、感じたところでしたので、ご意見として、言わせていただいたところでございます。
〇会長
　ありがとうございます。
　高砂市を変えていく上での課題ですね、あるいはその目標にしてる脱炭素は誰がどんなふうに実現していくかっていうような話だと思います。
　特に最近は個別の事業者も含めてサプライチェーン全体で脱炭素をどうするかみたいな議論も、強く求められるようになってきていますので、今はコミュニティと言っても何となく住民コミュニティだけのようなイメージですが、そこには大きな企業もあれば中小企業も、それに連鎖する形であるわけですから、そういうところとも意見交換をするような場を作っていくことが必要かなというふうには思っています。もちろん今日代表で来ていただいてる方もそうですけど、もっと現場で、それは無理だと言ってくれるような人も説得しないといけないかもしれませんのでそれが大事かなという、お話を伺って触発されてちょっとお話をさせてもらいました。
〇委員
　データ連携基盤と地域ポイントプラットフォームの仕組みについて、どちらが優先順位高いのかっていうことはあるかなと思います。統合するという考えもあるし別にっていうのもあるし、ポイントの部分は、クラウド系サービス SaaS で提供されてるものがあります。データ連携基盤自体は

今、広がって来てはいるけど、まだあんまり活用事例がないのかなと思います。
　また、ポイントと地域通貨はだいぶん違っていて、地域通貨は、汎用性というか上手くいったらパワーが大きいんですけど、現実的には、ポイントが広がってるみたいなところもあって、難易度と理想系みたいなところのバランスがあると思います。
　継続的なものでいうと、クラウドファンディングみたいなものや、一時的なクーポンみたいなものとか、どこまでねらうかというところは、進め方のポイントになると思います。
　地域通貨やデータ連携基盤を最初にいきなり導入するのは、結構リスク高いかもしれないという気がしています。
〇会長
　ありがとうございます。事務局から何か説明がありますか。
〇事務局
　委員がおっしゃるように、地域通貨のプラットフォームとデータ連携基盤というのはそれぞれ別の話ではないかというところもありますし、データ連携基盤の活用事例が少ないということも十分認識しておりますが、データを取得するツールとして、デジタル地域通貨のプラットフォームを使えないかというところの発想もありましたので、その視点でデータ連携基盤と地域通貨のプラットフォームの二つをあわせて都市 OS みたいな形にはならないかなというところも念頭に置いています。ただ、ハードルが高い、いきなりすべてを最初から入れていくのはリスクが高いのはおっしゃる通りなので、令和5年度に関しましては、その部分のスケジュールを見直し、まずは小さな実証から始めて、確かめていきながら、適切なサービスを実装し、データ連携基盤はもう少し後からの導入でもいいかもしれないというところは、確かめていきたいと考えております。ご指摘のとおり、地域ポイントと地域通貨は性質が違うということも十分認識しております。
〇会長
　難易度と継続性ということに関して、ここの協議会で、若干私の方から付け加えさせていただくと、今お金って性質がすごく変わってましてね、資本もスペクトラムがあるということが言われています。どういうことかということ段階的なグラデーションのようなものがあって、とても社会的なインパクトを求めるものから、非常にもうお金が儲かればそれで良いというものまで、段階があるというのが G－7 なんかでも認識されて議論されてるところです。
　そういうお金の見方を踏まえながらポイントの見方をどこに位置づけるかというのが、とても重要な議論になってくるというだと思います。とても貴重な話していただきました。
地道にと、市長が特に言われましたけども、地道にというところともう一つ、トランスフォームするための大胆さをどこまで持つかということについてもしっかりと議論することが必要かなという話だったと思います。ですから協議会でまた議論、そのあたりもしていただけたらなと思います。良い視点、ありがとうございました。
〇委員
　デジタル的なところって、やっぱり皆さんデジタルってなるとすごく難しいものっていう認識が共通であるように感じるんです。市民の関わり方、市民が主体的に動いていかないと、行政が引っ張っていったところで市民との差があると、行政の思いとついていけない市民の思いとが、広がっていくばかりだと思うので、そこのデジタルの部分を取り入れるときに、少し年配の方がどんなふうに関わっていったら、そのデジタルの部分に関わってくださりやすいかというところも、実際経験していて思うことで、その手段、そこをどんなふうにやっていくかっていうのがとても大事か

なと思っています。

要は、市民が動いていくというのが、市としても動きやすいんじゃないかなっていうふうに思っていて、みんなが幸せにはなりたいと思っているけれど、どうしたらそれがデジタルで形になっていくかっていうところ、もっと動きやすくなるんじゃないかなあというふうに思っていて、そういった共通認識を持つということが、難しいかもしれないんですけれども、そういう思いが見える化できたらいいのにと思いました。

〇会長

とても大切な視点だと思います。実際に、ユーザーというか使う人の立ち位置にたってものを考えてこれから議論していくことが、忘れてはいけない視点の一つだというふうに考えるべきでしょう。やっぱり、「デジタル」という言葉を使うわけですけども、これはかつて「AI」が何でもかんでも人工知能と言われていたのが具体的技術になると、自動翻訳であるとか別のことができて分割されていくわけですよね。何となくもやもやしたものが人工知能という形で言葉として残って、そういうプロセスをたどっているのと同じように、高砂らしい何か、そういう形になったときに、そういうようなものが自分たちの身近に感じられるようにしていくというような努力、何とかシステムがいっぱい並んでこれ使ってくださいだけではいけないなあと、だからデジタルと呼ばないデジタルの社会がやってくるという取り組みが必要だろうというふうに思いました。

〇委員

資料 34 ページの全体スケジュールについてちょっとお尋ねしたいんですが、スケジュールの中で、協議会があって、全体プロジェクトがありますよね。その下にあるデータ連携基盤とかデジタル地域ポイント制度とかいうものは、具体的にこれから作っていくところなんですけれど、これはセンタープロジェクトの一部ということで考えていいんですよね。

そうした場合に、それぞれ独立している計画になっていますけど、例えば実証実験、実証結果をどこかで反映するとか、相互の関係っていうのが見えないんですね。ですから、何を実証して、それをどこに反映して、どう改善してくっていうような関係が見えないと、なんていうか、ストーリーというか、そういったものがちょっとよくわからない。

最終的にどこにまとめたいのかが見えにくいと思うので、もうちょっとはっきりさせていただきたいなというのがまず一つです。

もう 1 点あるんですけども、会長がおっしゃったように、脱炭素って非常に重要で、計画をして実証するということを来年度取り組むことになります。そうすると、この実証の計画の中身がちょっと見えにくいと思ってますので、そこは明確にしていただければいいかなと思います。

〇会長

事務局の方からご説明いただきます。

〇事務局

11 月に説明したスケジュールの項目を変更したので、もう少しそれぞれの連動性やストーリーが見にくいというのは、その通りであると思っておりますので、ご意見をいただきながらもう少しわかりやすいスケジュールを、3 月末まで作りたいと考えております。

もう一つ、実証実験の具体的なテーマに関しましては、この後、令和 5 年度の取組についてというところで、説明をさせていただきたいと思うのですが、資料 48 ページには、実証実験の脱炭素行動可視化モデルとしての例示をさせていただいております。スマート節電や公共交通、自転車の活用といったところを、例えば、働く世帯や子育て世帯、そういう皆様をターゲットに、まずは小さ

く実証実験を始めていきたいと考えております。今後部会を設置させていただき、より具体な実証実験テーマも整理したいと思いますし、県立大学のゼミ生の皆さまからのご提案もありましたので、それらのエッセンスをできるだけ反映していきたいと考えております。

〇会長

おそらく、このスケジュールは、仮に家を建てるとしたら、マンションにするか一戸建にするかっていうぐらいの段階の議論なんですよね。

脱炭素ということだけが頭の上でグルグル回ってるっていう感じなので、これは住宅を建てる具体のところにうまく踏み込めてないのは、まだ未成熟なプランだということなんだろうと思うので、そこはこれから大分詰めていかないといけない部分だと思います。ツールの有効性も考えながらやっていかないと意味がないことになってしまうので、その辺の配慮はして欲しいなと私も思っているところです。

〇委員

脱炭素行動に地域の皆さんをいかに巻き込むか、運動論がとても大切だと思いますが、今の段階で住民の皆さんがどういう意識をお持ちか、すでにボランタリーに脱炭素に向けてこういう活動が始まっているみたいな話があったら、ぜひ教えていただきたいなっていうことと、今回の高砂市の取組を通じて、地域の皆さんがどういうふうに、幸せに繋がっていくのか、というところのビジョンを教えていただきたいと思います。

〇事務局

資料編 55 ページをお願いします。市民満足度調査の概要をお示ししております。この中で、地球温暖化による気候変動に危機感はありますかという質問に対して、そう思う、どちらかといえばそう思うという方、約 8 割の方は、危機感は持っているという結果は出ています。ただ、脱炭素行動といっても何をしたらいいかわからない、危機感はあるけど、行動を促すためにいろいろ取り組んでいきたいが、どう動いたらいいかわからないっていうところが一つのポイントであって、一番の課題でもあると考えています。

資料 46 ページお願いします。ウェルビーイングということで、LWC 指標の視点について、市民の暮らしやすさと幸福感が数値化し可視化されております。高砂市の考え方のたたき台として、LWC 指標の考え方をできるだけ活用できないか、特に、行政への信頼、地域の一体感というところを、市民の幸福度が向上する形でその指標の活用は考えられないか。市民満足度調査については、従前のやり方で実施しているんですけど、今後ちょっとその部分の視点を踏まえながら、計測していきたいということは考えていますが、まだちょっとフワッとしているということを委員はおっしゃっているのかと思います。

〇委員

温室効果ガスが非常に多いという課題を高砂として、住民の皆さんに内部化していくかっていうことがすごくチャレンジングな、皆さんにとってはとても重要なテーマだっていう話なんで、そういう意味で住民の皆さんにこの活動を通じて、本当にこの地域良くなったねとか、理想は仲間意識ができるような社会感があればいいのかなというふうに思ったんです。先進都市として高砂市が、ウェルビーイングな都市となっていくように今感じました。

〇事務局

資料 7 ページをお願いします。前回の協議会にて脱炭素との関わりが薄いのではないかというご意見を頂きましたので、1 ページ追加させていただいています。高砂市が脱炭素に取り組む背景

ということで、2050 年高砂市ゼロカーボンシティ宣言を令和 3 年 7 月に宣言いたしました。その中で、高砂市における二酸化炭素排出量の割合が全国平均の 2 倍以上、約 80%を、エネルギーや産業部門が占めているというところが課題です。持続可能な社会を実現していくためには、やっぱり行政と住民、事業者の皆さんがより緊密に連携して、市民とともに、その排出量削減に取り組むことが非不可欠であるということで、それを地域全体で脱炭素社会の実現を目指すということでいくと、事業者の皆様が全国平均の2倍以上を頑張っていただかないといけないということであれば、市民の皆さんも、それを行動変容で支えるのであれば、理屈としては全国平均の2倍のペースで削減していかないと話が合わないんじゃないかというところもありますので、市民の行動変容というところで、その意識を、地域全体で削減していくんだっていうところを示していくのが必要ではないかなというのは考えていますが、とてもハードルの高いことというのもよく理解はしております。 高砂市の特徴としてこういうことがありますので、だからこそ脱炭素を進めていくっていうところは大きな課題ではないかとは考えております。

〇会長

2 点質問があるんですが、1 点は事務局に、指標の話が出てきてましたけど、今回のプロジェクトだけではなく、この指標の話はどのような場で構築されていくのでしょうか。

〇事務局

指標に関しては本市総合政策審議会で議論を重ねながら、意見を頂きたいと考えております。

〇会長

もう 1 点、委員がご存知であればご披露いただきたいんですが、市民の間での脱炭素の取り組みとして、少し面白い取り組み、それは大きくても小さくてもいいですが、何かあれば、ちょっとご開陳いただけるとありがたいです。

〇委員

先ほどご説明あったように行動変容だけで、二酸化炭素を削減するというのは難しく、できないと思います。ですからハードとソフトという考え方でやっていかないとできないと思うんですね。脱炭素計画を策定しておりますが、その中でもハード、例えば太陽光を使用するとかそういったものを、どう使うのかという様々なところで、市民の行動変容というものが、車の両輪のように、組みあがってないと無理だと思うんですね。さらに高砂市は、事業者が非常に多いですから、市役所、市民、事業者がどのように取り組んでいくと 2050 年にゼロカーボンを達成できるかという計画と、この未来技術実装事業がうまく連携しながら、それを実現していくことを考えていくというように私は理解しています。まずはそのハード・ソフトの両輪で考えていくということをきちんと意識していかないと、ちょっと行動変容だけでやるのはかなり苦しくなります。未来技術実装事業では、それをコミュニティとして定着させて、ゼロカーボンを達成するような市民意識を醸成するということはいいと思いますが、もうちょっと広く考えられた方がいいのかなと思います。

脱炭素行動に関する面白い取組については、私はまだ把握しておりませんので、市役所の中で、様々な情報を収集していただければいいかなというふうに思います。

〇会長

ありがとうございます。いろんな情報提供や情報収集をして、皆さんにご披露できるようにしてください。お願いします。

〇事務局

ハードとソフトの両輪を回すというのは、まさにその通りだと思っておりますので、いろんな事

例をご紹介していくような準備をしていきたいと考えております。
〇会長
　付け加えると、おそらく大きな企業さんは、もうグローバルな要請に耐え切れず、圧倒的にこれからやると思うんですね。そこについていけるかどうかが、高砂で立地してる中小企業がそのサプライチェーン全体の中でどうなっていくかという議論が、もうすでに始まっている、あるいはこれから始まっていくんだろうなと思うんですけども、そんな展開の中で、市民がそんなに努力しなくても減る可能性もあるわけですね。これはちょっと、意地悪な意見ですけれども、脱炭素の取り組みをして市民は一体どういうことを得られるのかというところが、きっと皆さん、ウェルビーイングがよくわからないなんて言ってるところにつながる部分だと思うんですね。ここをしっかりと、部会でもいいですから議論していただくことが重要かなと思います。
〇委員
　他の企業様もそうだと思いますが、弊社でも 2030 年までに 50%、2040 年には NET ZERO といった社としての目標を謳っています。とはいえ、事業者の活動にばかりフォーカスしてしまうと、まさにいま会長がおっしゃったような方向（市民がそれ程努力しなくても…という方向）にもなりかねません。一緒にどうやってやっていくかを模索すべきで、そのあたりの議論が今後必要だと思います。

（2） 令和 5 年度の取組について
〇会長
　既にご意見のなかで来年度どうするんだという話が出ています。スケジュール的にも、今のままでいいのかということが、ご意見として出ていますが、まだご意見があるかと思いますので、ご発言をいただけたらと思います。
〇委員
　脱炭素の背景について、高砂市の製造業等が排出する割合が全国平均の 2 倍というのが「すごいな」と感じました。高砂市は面積の割には浜手に大手企業が 10 社以上ありますし、「そういうことなのか！」と説明でわかりました。前半の説明で割愛された中に、会長のプレゼンの内容がすごくわかりやすいと思いました。今後、第 3 回、第 4 回と協議会を重ねることで明確にわかりやすい取り組みがどんどん出てくるのかなと思いました。それと、市長が前から言われてる、人口をふやしたいというところ、高砂市に住んでよかった、住みやすいまちにするという背景についても、資料 38 ページで示されている、地域コミュニティ維持、充実とか、共助、共感の力とか、地域コミュニティ充実などについては、具体的な策、明確な取組というのも今後出てくるのかなと思います。先は長いと思いますが、頑張って頂きたいと思いますので、よろしくお願いします。
〇会長
　一言だけお願いしておきたいのですが、頑張ってと言わずに、カウンターパートとして頑張ろう、頑張らなきゃいけない状態なんだろうなと私は思っています。ちなみにそういうことを「自分ごと化」と最近は言うらしいです。ひとつよろしくお願いいたします。
〇事務局
　今回説明は省略させていただいたのですが、非常にわかりやすい資料だったというのもありましたので、22 ページから 26 ページまで参考につけさせていただきました。何かポイントみたいなところがありましたら、お話いただければと思います。

〇会長

このビジョンというのは総合計画の中にあるということなので、脱炭素の話も、そのビジョンの中で結びつけて考えていくということと、やはり何のために脱炭素に取り組むのかを忘れないようにしないと、たとえば、今まさにそんな時期ですけど、節約するけど何のために節約しないといけないかって、家計は苦しくなる一方で節約はしなければならないと言うのだけれども何のために節約してるのか見えないからみんな大変だとわけですよね。もう開けない夜はない。何か新しいものがそこで生まれるということをしっかりと考えることが必要だということです。ゼロカーボンシティ宣言というものは、市長が記者会見でゼロカーボンするぞというだけで宣言になるらしく、高砂市だと言ってるわけじゃないですが、中身はなくてもゼロカーボン宣言は OK なんですね。計画の中で、具体的に何するか書くよって言うだけでも OK のようです。ただ、十分広がってないっていうのが現実で、その難しさみたいなあるんでしょうね。結局やっているのは行政中心の取組だなという勝手な思いでそれぞれの取り組みを資料にマッピングしてみました。そういったものをこれからはもっと企業と住民と一緒にやる取り組みに進化させていかないといけないというような部分ですね。一方で高砂市はその取組を支えるエコシステムのような環境づくりに力を入れていくことが大切かなと考えています。

もう、研修会で市役所のみなさんには、これまで通りでは絶対駄目というぐらいの気持ちでやっていかないといけないという話を、大体 1 時間ぐらい話しさせていただきました。

〇事務局

ありがとうございます。

とても貴重なお話を 1 月 27 日にして頂いたので、この協議会でも一部ご紹介したいと思いましたので資料をつけさせていただきました。

〇会長

今回なぜスケジュールを微調整するのかというと、中身がまだ詰まってないから少し入れ替えたぐらいで、中身を本質的に変えたわけではありません。

その一方で 33 ページの資料ですね。事務局から聞き取りしながら作った資料ですが、住宅を作ることを考えたときにどんな設計図を書きますかっていうと、漫画みたいな絵を書くのが最初の段階ですね、今言うとはっきりとこの漫画の段階だというふうに、それでもやっぱり、主人は、書斎が欲しいなとか奥さんは自分の友達を呼んで遊べるようなスペースが欲しいなとか、子供はそれぞれの部屋が欲しいなんて言ってるような段階ですね。

データ連携基盤が必要だと言っているのは、あったらいいねみたいな話が中心になっていて、これからですね、もう少しそこを詰めないといけない。最終的にそれを発注したりお金にするという詳細なシステムベースの設計が必要になってくる。この辺りは実際に民間で働いていたご経験の持つ方からするとそうだろうと思われると思うんですが、今抜けているのはこの真ん中の部分ですね。隣近所の訴えって何っていうのははっきりさせること、隣近所のおじさんやおばさんに簡単に説明して理解してもらえるようなことが必要で、市民とは誰か、さっき関係人口という話がありましたけれども、企業で働きに来てくれている人もそうですね。私も巻き込まれてしまったのできっと関係人口の人になってるんだと思います。市内事業所をどうグリーンにしていくかっていう取り組みがきっと大事なんですよね。

それから、技術を理解しないといけない。技術を実際に実装して使っているところからいろんな話を聞かないといけない。この取り組みで言うと、全体で脱炭素化していくための、SDGs も含め

てですが、コンパスっていうようなものを作っていくことが必要だと、企業は SDGs コンパスっていうのに基づいて基本的には、自分の仕事にどう位置づけるかということを中心にして取組を進めていますよね。

主として社会貢献や、地球環境にとってプラスになるというそういう考え方ですね、グローバルの要請でやっていかないと排除されるというような危機感はあるんでしょう。そうしたことも踏まえて、まず見える化からやろうというところが今先ほどの話で出てきたことです。

問題はその次ですね、実装ですからね、実証実験じゃないんで、長く定着するようなエコシステム、環境を作っていかなければいけないというところが、ポイントになるので、幾つかその支える仕組み、お金の仕組みとの親和性をどうするか、ポイントが何かに繋がるわけですけど、この辺の議論をしておかないといけない。その上で、どうやって広げていくか、これを戦略化していくという課題についてもできるところから実証に流し込んでいくというような形になっていくんだろうなと、ここをもうちょっと説明していただいたらですね、いきなり実証事業に突入してしまうみたいな感じがしていたので、このあたりをどういう順番でやるかということは、ちょっと事務局と私の方で整理をさせていただきたいと思っています。

その際、これは私からのお願いなんですけど、皆さんがすでに持っているネットワーク資源、人との関係性の資源を、ぜひ惜しみなく提供していただきたいなと、うまくやっているところ、あるいは失敗したところでもいいです。そういうところで、あるいは企業でですね、そのサプライチェーンの中でどうやろうとしてるかっていうような取組のところでどんどん出して紹介して欲しいなと思います。

高砂市の中で取り組まれていることはきっと高砂市の方がよくご存知のはずですから、市役所の中で全部集めてもらったらいいと思います。部会などの議論を通して結局何に集中するかですね、場合によってはやめるものもあってもいいかと思うんですけどもそういう選択をしていくことが重要かなと考えています。

先日、私の所属してる学会の関係でシンポジウムをやろうという話があって NFT とかメタバースの関係の取り組みをしてるところと人間関係を何とか作り上げましたので、そういうところの関係者を引っ張ってくるとか、環境省関係者の OB の人とかですね、環境省の外郭団体で、自治体をどう繋いでいくかという取組をしてるところのスタッフの方とか、そういうネットワークがありますので、そうした方をゲストスピーカーとして、リモートも活用して部会では報告者からの報告に基づいて意見交換していくようなことをやっていきたいなというふうに思ってます。

〇委員

先ほどのご説明で、本プロジェクトで実現したいこととして一枚でまとめていらっしゃいますが、脱炭素の話と、人口減少対策の話が、どのように関係しているとお考えなのか、質問です。

〇会長

事務局の方はいかがですか。

〇事務局

資料 44 ページに、今回、デジタル田園都市国家構想総合戦略に変わったんですけど、これまでの総合戦略、二期の総合戦略の中で、その視点として SDGs を原動力として地方創生しましょう、脱炭素化に取り組みましょうというような視点を打ち出されておられました。

その中で、この地方創生自体が人口減少対策だと考えておりますので、この視点も取り組むことで人口減少対策にもある程度繋がっていくというところ、そういう視点で、資料を作らせていただ

いたところです。もうちょっとわかりように、整理はしていきたいと考えております。
〇会長
　例えば、高砂で起業したら、結構世界で評価される、高砂で実際に実現し、そういう中で企業活動をしているということがステータスになっていくっていうようなことも一つなんでしょうね。
　そこで新しいユニコーンでも何でもいいですけど、そんな人が登場してくる、あるいは住民活動、もう高砂でやってるのは、一つの目的じゃなくって複合的な目的に向けて取り組みがされている、これはどちらかというとSDGs寄りの話になるのかもしれませんが、そういう持続可能な開発が定着してるような地域だというような評価がされてくると、外から見る、豊かさでもあるし、中で見る豊かさでもある。そういう意味で、これまでの高砂市のイメージがさらにバージョンアップできていくというのが、おそらくイメージなんだろうと思います。苦言を呈するとすれば資料が若干バラバラ感を受けるので、大事なことはどの紙にも書いておこうということをすれば、書くたびに、何考えてたかなということを思い起こせるかなというのが、私からのちょっと一言でした。
〇委員
　脱炭素の話で行くと、量が二倍ではなく割合が二倍ということは、おそらく、地域の事業者の事業が今も活発な地域であるということ、例えば他地域ではかなり撤退してしまってる状況（事業者の割合が減る）ですので、ある意味、地元の感覚でいうと事業が残っているから他地域よりウェルビーイングな状況が一面ある。そのような状況がありつつ、一方で脱炭素っていう状況がある中で、何か次の段階に移らなきゃいけないっていうところの難しさはあるのかなというふうには思ってます。これまで恵まれているというか、事業者さんの力がすごくあるっていう状況に脱炭素面での難しさがあり、そこにデジタルっていう手がかりっていうがあるという全体像なのかなと思います。割合が二倍であることは悪いことというよりかは全体的には良いことなんじゃないかというところではないかと思います。
〇会長
　脱炭素のコミュニティをどうやって作るかということが一つのポイントで、そういう課題解決型コミュニティがきっと、レガシーとして残るのでしょうね。そういう課題解決型コミュニティをうまくたくさん作っていくことができるようになれば、それは子育てに展開したり、安全安心な食の問題に展開したり、教育の問題に展開したりしていける、そういう素地になっていくもんだろうと、そういう意味で、最終的にウェルビーイングに繋がって、都市としての健康という問題に繋がっていくということになるんだろうと思います。
〇副会長（市長）
　前回も最後に私の方からお話をさせていただきました。
　皆さんからいただくご意見は、やはり行政が進めていっても市民の皆さんが理解していただかないと前に進まないというふうに感じております。先般も県立大のゼミの方々に、三つのテーマで発表していただきまして、フードドライブの活用、ごみの堆肥化、健康づくり促進ということで、いずれも本当に高砂市のことを考えて発表いただきまして、私ども行政側も、それを参考にしながら、市民の皆様がどういうふうに理解していただいて、地域通貨、ポイントの付与に結びついていけるのか、委員の皆様のご意見も参考にしながら、地域が動くように導いていけるのかということで、脱炭素社会をどうクリアしていくのかというのが大きなテーマになっていくと思います。具体的に進めていく中で明確な目標設定をして、具体的にどう進めていくかということですので、どうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

〇会長
　それでは、事務局にお返ししたいと思います。
〇事務局
　来年度の協議会は 7 月頃を予定しております。また、年度変わりましてその時期になりましたらまた通知させていただきます。部会に関しましては、一応会長に一任いただいたうえで、相談させていただきながら、しかるべき時期に通知、多分全体会より前に通知させていただきたいと思います。
〇司会
　ありがとうございました。これで協議会は終了いたします。
オンラインにご参加いただいてる皆様もありがとうございました。
本日の予定をこれで終了させていただきます。
オンラインのミーティングは接続を終了します。

別紙　名簿

区分	委員	所属	出欠
国	矢崎 剛吉	デジタル庁国民向けサービスグループ参事官 （国の現地支援責任者）	出席 （オンライン）
国	横谷 勉	総務省近畿総合通信局情報通信部情報通信振興課課長	出席 （オンライン）
国	小牧 兼太郎	総務省地域力創造グループ地域情報化企画室兼マイナポイント施策推進室室長	欠席
国	池本 忠弘	環境省地球温暖化対策課脱炭素ライフスタイル推進室室長補佐	欠席
国	酒井 良文	環境省地球温暖化対策課脱炭素ライフスタイル推進室室長補佐	欠席
国	西尾 優花	環境省地球温暖化対策課脱炭素ライフスタイル推進室環境専門調査員	出席 （オンライン）
県	赤澤　茂	兵庫県情報戦略監	代理出席 （日坂 英則氏）
大学等	畑　正夫	兵庫県立大学地域創造機構教授	出席 （会長）
大学等	土川 忠浩	兵庫県立大学環境人間学部教授	出席
大学等	宮﨑 光世	兵庫大学現代ビジネス学部 現代ビジネス学科教授	出席 （オンライン）
商工業	浜谷　和英	高砂商工会議所　議員	出席
事業者	満田 美智代	三菱重工業株式会社総務部 総務第三グループ長	出席
事業者	竹内　健吾	株式会社籠谷　企画開発室　部長	欠席
事業者	春下 充代	ありがとうの種農育楽園主宰	出席
市民団体	松本 克英	高砂市連合自治会会長	欠席
広域自治体	小川 佳宏	東播磨スマートシティ推進協議会会長	出席
市	都倉 達殊	高砂市長	出席 （副会長）